



カット・皆川泰蔵

スポーツについて

瀬口 彰

ある日の朝刊で、子供達に遊び場がないという記事が目についた。家庭の三〇パーセントは、庭だけでなく、空地や公園、児童遊園などを含めて、遊び場が全くないという。むかしは子供の楽しい遊び場がいっぱいあった。私の家は大阪の町の中にあつたが、道路でバッティングやノックをして野球の練習ができた。織田幹雄や南部忠平に刺激されて、走り高跳や三段跳に熱中し

随 想

たこともあった。日曜日になると野球の道具を肩にして一時間も歩いて練兵場へ行った。広い練兵場ではすみずみまでいっばい仲間があるので、適當年頃の相手をさがして試合を申し込む。競技のはげしい興奮とフライトがなまなましい記憶に残っている。夕暮にはくたくたに疲れたからだをひきずりながら、心にはいっばいの満足をつめて家に帰った。私達はだれにおそわることもなしに、自然にスポーツの本質にふれることができたのである。最近の子供達はテレビのスポーツか、あるいはこまぎれに分断されたスポーツしか知らないのではな

いか。わが国のアマチュア・スポーツの元締めである体協では昭和三十七年六月二十三日のオリンピック・デーを期して、子供達に正しいスポーツを経験させようというねらいで、スポーツ少年団々々を組織したが、最近ではスポーツの底辺を拡大するために少年団組織の拡充を重点施策のひとつにしている。スポーツの振興は一に優れた指導者二に完備された施設、三に理論的に裏付けされたテキストとサービスの方法はきまっ

ているのだが、スポーツ少年団の指導者の大部分は相変らず子供好きな商店主や会社員であり、施設面でもほとんど進展をみせていない。

日本は世界で屈指の経済力を持つようになったというが、生活環境水準は最高の英国の約二分の一、比較的水準の低いフランス、イタリアのほぼ三分の二といわれる。個々の生活活動水準の中で、余暇にいたってはアメリカの一〇〇に対して、七・七とその立遅れが特に目だつ。青少年の余暇活動に重要な意味を持つ公共社会体育施設は約十五万という全施設のわずか六・九パーセントしかなく、しかもそのうち小・中・高の学校施設が全体の六九パーセントを占めているのだから、体協が首頭をとっている、トップ・レベルの選手の充実から底辺の拡充へというスローガンがいかにもそらぞらしく感じられる。

健康と文化は表裏の関係にある。今日、健康の諸問題が循環系障害をはじめ、虚弱脊腰痛、肥満、無気力やノイローゼというように、どちらかといえば慢性的な運動不足に関連するものが多くなつており、しか

もその年齢層の低下が心配されている。運動に代用する薬剤がないのだから、西ドイツのゴールデン計画とまではゆかなくても人口と経済力に相応するスポーツ行政がなければならぬ。

(昭和十九年文卒・商学部教授)

体育振興の時間

上田 堅一郎

私は新学期の時間割を教務から受け取ると、自分のブランクの時間で、体育の実技とちか合っていない時間を探してみる。体育の実技のない時間には体育館を授業に使っていないので体育科の先生に御迷惑をかけることなく存分にリクリエーションができるからだ。一週三十四時間の中には丁度適当な時間が一時間位はあるものだ。そのような時間を見つけると自分の『体育振興の時間』と称して大切に使うことにしている。その時間には雑務は止むを得ないことその他は一切しないように、また授業の準備も支障のないよう配慮することにしてい

る。生徒諸君が週に三時間の体育の時間が必要ならば、教師も週に一時間程度の体育の時間を持つことは、健康管理の上で意義のあることだろうとか何とか勝手な理屈をつけて体育館に通い、実は下手な卓球などして一時間をつぶすのである。勿論相手のいることではあるが、同じような体育振興論者は必ずいるものだし、また授業のブランクの生徒などが来ていけば、教室では得られない交流も自然に出来るという副産物もある。が、この体育振興も余り熱心になり過ぎるととんだ失敗をやることもある。夏期など、時間ぎりぎりまでやっていたが最期、授業にいつて吹き出す汗をどうしようもなく往生するのである。生徒にとって体育の後の講義ならばノートを取る手をやめて、下敷をうちわに講義を聞くこともあていはいはできるかも知れないが、講義をする身ではそうもならず、ひたすら遊び過ぎを悔いるのみである。

私は学生時代、体育は余り得意でなく、特に小学校の頃は体も弱く、体操は苦手中の苦手だった。中学校に入って人並に野球の真似事などはやってみたが、運動部など

とてもこわくて入れなかった。そんな私が大学を卒業して同志社高校に勤めてからむしろいろいろなスポーツに接するようになった。運動部の顧問をしているうちについて退屈まぎれに生徒と一緒に練習したりして覚えたのである。卓球部の顧問をしていた時、私が何度打っても相手コートに入らずに、出してばかりいるのを飽きずに何度でも打ち返してくれた卓球部の諸君達、また硬式庭球部の顧問をしていた時、部員が多くて一人一人のコートに入る時間が極めて制限されているにもかかわらず、私が練習してみたいというと、本当に快よく物にならない私の技術のためにコートに入る順番を割いてくれた硬庭部の諸君達に感謝せずにはいられない。見るため見せるためのスポーツでなく、下手なりに自分でも楽しんでスポーツの醍醐味を教えてくださいましたからである。そして体育の最も苦手であった私を、運動好きにしてくれたからである。

今年も私の『体育振興の時間』を大切に守りたいと思っている。

(高校・教諭)